

北安曇郡神城地区の植物 親海湿原を中心に

横 内 斎

I. Yokouchi: Vascular plants of Kamishiro in Kitaazumi-gun,
with special reference to Ohmi Moor

北安曇郡のほぼ中央部に佐野坂の小鞍部があって、姫川と農具川の分水嶺をなし、北部は小谷地方といい姫川溪谷地方を占め、南部は仁科三湖を出でてより急に平坦地となって安曇平の北端を占めている。神城地区は小谷地方の南の入口で、もとは神城村という一村を作っていたが、近隣村北条村と合併して白馬村と呼ぶようになった。私は小谷地方の豪雪地帯に生える植物、殊に日本海地域系（裏日本系）の植物が、前記佐野坂の分水嶺を越えて平坦部に如何に影響しているかを見たいと永年心掛けていた。高山には何回も行きました仁科三湖付近も何回も訪れたが、姫川沿いに歩いたことは局部的にはあったが、一村をまとめて採集する機会にはなかった。今から30余年前、神城の大滝下でキバナイカリソウを採集する喜びを得て、小谷地方を系統的に調べてみようと思志したが、その機会に恵まれず長い年月を経てしまった。幸運にも昭和40年から三年間10回程この地を訪う機会を得、ことにそのうち5回は神城に関係があるので、一応まとめて同学諸氏の批判を得たいと思って稿を起したわけである。

この神城行のうち40年の夏8月には、東京都立大学助教授水島正美博士が同行され親しく教を賜った。しかるに同博士は昨年9月わずか47才の若さで昇天されてしまった。直接教を受けた一人として謹んでその御霊に謝意と哀悼の意を表するものである。

また長野県科学振興会は、その費用の全部を補助せられた。併せ記して謝意を表するものである。

神 城 地 区

仁科三湖の最北端の湖沼は青木湖で、その湖面は海拔822mである。この湖の北即ち小谷地方との境界近くに、西側から891.2mと870.3mの丘陵があり、これが北に延びて佐野坂および830m程の鞍部をなし、ここを国鉄大糸線と国道糸魚川街道が走り、この丘陵は漸次高度を増して東走している。

西側は五竜岳と大黒岳との中間から派する尾根となり、大遠見山2106.3m、小遠見山2009mを起し、東北走して天狗岳1926.7mとなり、南走して1665.2mの無名峰となり、北アルプスの偉容は村内からは殆んど望めない。わずかに村の北端から支脈を望むのみである。北側は丘陵性

の山地で、東側は佐野坂の鞍部で大町市平地区に連っている。住居、田畑は中央を流れる姫川に対し東西の緩傾斜地に発達している。

この地を色どる植物は、本県の中心部のものと殆んど大差がないが、もっとも優占しているものは、日本海地域（裏日本系）のもので、村落部や山地に生えている。たとえば、チャボガヤ、ハイイヌガヤ、シロヤナギ、ヒメヤシャブシ、ケイタドリ、エゾアジサイ、チシマネコノメソウ、エゾユズリハ、アカイタヤ、ハイイヌツゲ、ヒメモチ、オウタチツボスミレ、スミレサイシン、ヒメアオキ、アカモノ、ツルコケモモ、ムラサキヤシオツツジ、サイコクミツバツツジ、クロバナヒキオコシ、ヤマルリトラノオ、タニウツギ、ホロムイソウ、チシマザサ、オウカサスゲ、ホソバカンスゲなどで、ほとんどの種は、佐野坂の分水嶺を越えて大町市平地区に侵入しているが、南安曇郡には入っていない。スミレサイシンが聖高原に産し、ハイイヌツゲ、ハイイヌガヤ、ケイタドリ、クロバナヒキオコシが保福寺峠に分布し、そのうちハイイヌツゲ、ハイイヌガヤが諏訪まで侵入し、オクチョウジザクラが武石峠に広がることなどは、神城地区とは分布経路を異にし、富士火山脈を南下したと見るべきであろう。

本地域で特筆すべきことは、アサマフウロ *Geranium soboliferum* を東佐野で採ったことであろう。

なお注意すべきものには、栽培品ではあるが珍種のニドグリ（サンドグリ）*Castanea crenata* var. *matsushitana* H. KOIDZUMI が民宿千尋館の土蔵の裏手道路際にある。一年間に二度または三度花が咲き二回結実する性質を有する珍しいもので、県内にはこの外に、下伊那郡大鹿村、上伊那郡朝日村、下伊那郡上飯田村、下高井郡市川村、上伊那郡富県村、埴科郡松代町に見られる。

親 海 の 湿 原

神城の平は佐野坂の鞍部から約100m下に細長く続くもので、長さ約3km、巾約1.5kmで旧鹿塩湖といわれ、最下流のがくまヶ原には泥炭の堆積もみられるから、いちじは浅い沼であったと考えられる。この平は仁科三湖と同時代の形成と認められ、第三紀中だろうと推論されている。この最北端に親海の湿原があり、幾つもの水流と小規模の水溜りと湿原とから成っている。湿原は初め200ha程もある（約30年程前）大きなものであったが、戦時中の食糧難と戦後の食糧不足とから開墾され、面積は漸次減少となって、今は佐野坂下に半月状に残る狭少な地域になった。それに加えるに西南隅よりのヨシの侵入が甚しく衰滅の一途をたどる状態にある。

湿原に見られる主な植物は、ショウブ、セリ、ツルヨシ、ミゾカクシ、アゼガヤ、キツネノボタン、イヌコリヤナギ、クビキダイコンソウ、オウミソソバ、ツボスミレ、サワオグルマ、オウカサスゲ、ミズオトギリ、ヘラオモダカ、イオウソウ、サワギキョウ、ドクゼリ、カワズスゲ、モウセンゴケ、ミズトンボ、フトイ、カンガレイ、ノリウツギ、イソノキ、コケオトギリ、ヤナギトラノオ、ホロムイソウ、ウメバチソウ、ノリウツギ、アヤメ、カキツバタ、ツルコケモモ、コウヤワラビ、イヌゴマ、

コマツカサススキ、サンカクイなどが見られ、浮葉植物にはアカウキクサ、ウキガヤ、ヒツジグサ、オヒルムシロなどが目立ち、沈水性のものにはタヌキモ類、イトモ等が得られる。

これらのうちもっとも注意を呼ぶものはホロムイソウ *Scheuchzeria palustris* であろう。本種は尾瀬ヶ原に産し、とんで飛驒の国でみづかり、ここ親海の湿原に得られた。これは尾瀬と飛驒とを結ぶ中間地帯で、過去の分布をつなぐ一線上の点として重要であり、地史学的に見て興味ある現象であり、本県唯一の産地としても重要である。さらに一種ヤナギトラノオ *Lysimachia thyrsiflora* がある。本種は大井博士によれば大陸との共通種で、わが国では本州では常陸、上野、下野、越前以北と北海道に産するという、この種が本湿原の一小水溜りに、数株見られることは、本種の分布が南に広がったことで、いかえればここが本種の南限とも言える。しかし私は昭和39年上水内教育会の同郡湖沼調査のさい、飯綱高原の論電池の北岸に多量に産するのを確認している。

文 献

- | | |
|--|---------------|
| 北安曇郡誌編纂委員会(1971)北安曇郡誌 自然 | 同郡誌編纂委員会 |
| 寺島虎男(1969)ホロムイソウの分布南限について | 山と博物館 大町山岳博物館 |
| 田中阿歌麿(1930)日本北アルプス湖沼の研究 | 北安曇教育会 |
| 小泉秀雄(1929)松代の二度栗 史蹟名勝天然記念物調査報告 | 長野県 |
| 横内斎(1970)長野県の植物 | 昭和45年 信教出版部 |
| 横内斎(1950)長野県の名勝と天然記念物 | 林友会長野支部 |
| 高橋秀男・中村武久・平林国男(1969)白馬後立山連峰とその東方山麓のフロラ | 神奈川県立博物館 |

〔新刊紹介〕 志村義雄著「日本シダ植物生態写真集成」採集と飼育の会、昭和47年12月20日発行。B5判、原色写真4頁、本文写真530頁(図版610)、全600頁、¥7,000。

本会の会員の一人静岡大学の志村さんが、豪華本を出版された。志村さんのシダとのつき合いは、20年以上になる。北海道から奄美大島に至るまでのほとんど日本全域を踏査、日本産のシダ植物の生態観察を続けられ、一つ一つたんねんに生態写真をとり続けて来られた。その一部は、「採集と飼育」に連載されたが、今度、一冊の本にまとめられたわけである。掲載されているシダ植物は、520種類と、ほとんど全部の日本のシダの生態を学ぶことができる。奄美大島特産のアマミデンダは初発見以来実に30年目の再来であり、トログチイノデのような特産種をも含み、オオバヤシャゼンマイの孢子葉は世界最初の写真である。1000部の限定出版であるので、品切れに近い。

(T. S. 生)